

人間の環境世界と世界

—ユクスキュルとハイデガーについての思考の環動—

中原 淳 一

(帯広畜産大学心理学研究室)

1997年10月31日受理

Umwelt und Welt des Menschen

—Die Gedankenkreiselbewegung um Uexküll und Heidegger—

Jun-ichi NAKAHARA

I なにを問題にするのか

「世界(Welt)なる地平の上での、人間と環境(Umwelt)との関係を(哲学的に)問直すこと」が課題であると、大庭 健氏は述べている¹⁾。本稿での筆者の課題も同じように表現できる。これに続けて同氏は「今は、例えば Uexküll や Gehlen の時代ではない」と書いて、同氏の議論は「環境との関係における生体システムの自己組織化過程」という「環境」を脇役にした先端的なテーマをめぐって展開していくことになるが、筆者は同じ書き出しで始めて、しかし大庭氏とは全く違った課題の取り扱いをしたい。また、以下で明らかになるように、私の問は(哲学的に)とは言えそうもないので、その部分は括弧に入れた。

Uexküll や Gehlen についても、彼らを掘り出し物として時代屋的に店先に並べて、今日の値段を付けるつもりはないし、どだい修行不足で値が付けられそうもない。ただ筆者は、Uexküll の環境世界(Umwelt)の概念と、Heidegger が使っている環境世界(Umwelt)の概念を、しゃにむに結びつけたいのである。これは業界における、洗練された、いわゆる「哲学的問い」ではない。業界外の普通の人間の、素朴すぎるぐらいの想念、「両者が同じ用語を使うからには、少しは似たこ

とも言っているんだろう」ぐらいの、子供じみた好奇心から出ている。ある時期の子供は、発音がにている単語は同じ対象を指すと考えているから、伯父が汽車であることについて深く悩んでいる。筆者の課題もこの子供の悩みと同類である。ただし Uexküll も Heidegger も共に Umwelt(環境世界)²⁾の用語を使い、さらにそれについての優れた理論のあることが肝心であろう。従って先の子供の疑問は、その成否は別にして、更に追求するための材料があることになる。

Uexküll は、生き物がその直近の周辺環境と如何なる繋がりを持っているのかを問題にした³⁾。彼は言うところの[環境問題]は知らなかったが、生き物を最も身近で取りまいてる彼の周囲を環境世界(Umwelt)と呼んで、それを問題にした。Heidegger は、今ここで生きている人間が、「自分の」「身近な」環境世界(Umwelt)で、どんな様相で存在しているのかを問題にした⁴⁾。ここでは環境は、人間にとってもその他の生き物にとっても、自分の体にくっついてる身近な生活する場である。したがって逆説的な言い方になるが、そこでの個人的な問題が真正の世界問題になる可能性がある。ある問題が、あらゆる地域のあらゆる個体において同一の問題として出現すれば、それは個体にとっての個別問題であると同時に世界に具体的に現れている真正の世界問題であろう。例えば、「地球環境問題」とはそのような問題である。

本稿では上述した課題を次のような手順で進めていく。Uexküll と Heidegger をしゃにむにつき合わせると言っても、ある順序を考え見通しを立てておかなければ、もともと強引なことなのであるから、議論が纏れたままになってしまう可能性が高いと思われるからである。

1. Uexküll, J. v. が、環境世界(Umwelt)と呼んで概念規定を与えた場では、人間を含めて動物は、どのような枠組みで把握されているのか。
2. 動物は、それぞれの種に固有の環境世界に閉じこめられているとする考え方にたいして、他の動物とは違う人間の特殊性や優位性をいう人々は、どんな考え方を提出しているのか。
3. Heidegger, M は、現にいま生きている人間が、そこで日常生活を送っている場を、環境世界(Umwelt)と呼んで、多義的な世界概念の一つであるとしたが、

その環境世界での人間は、彼によればどのような存在者であるとして把握されているのか。

第4. 生物や人間の把握の仕組みにおいて、両者に通底するものはなんであるのか。通底するものがあるという予見があるから、1と3はそれを念頭において記述する。

第5. 両者に通底するものは生活体の傾斜、存在的に言えば、動物に於いては「欲求」、人間に於いては「欲望」として取り出されるはずであると予見している。そこから、欲求や欲望の照射する限界範囲としての〈環境世界〉、それを超えた〈世界〉での「欲望」の変容という言説が可能であると思われるので、そうした欲望の運動が「地球環境問題」という「世界問題」を扱う場合に持つかも知れない意味について考察してみる。本稿を概ねこのようにして構成する予定である。

そして冒頭に文章を借りた大庭氏の論文は、今から11年前のものである。この時期、地域の生活環境の悪化があり、それが地球規模に拡大していくことについての危惧はあった。「環境問題」という問題は、地域の問題としてあった。しかし、これがすぐにでも宇宙船地球号の問題になるだろうという認識は一般的ではなかったようである。上に引用した大庭氏の論文が寄稿されている、全16巻で100編以上の論文からなる哲学講座に、哲学的見地から「地球環境問題」を取り上げている論文は一つもない。もちろん「哲学はこの問題と関係しない」というのが理由ではないだろう。地球全体の問題だという認識がなかったのである。しかしただかdecadeの間に状況は大きく変わった。

この問題が、人類の「最終問題」になっているという認識は、リオ・サミットを経ることで強まっている。かつては「環境問題」は「(物質についての) 科学が解決するだろう」という楽観論もあったが、現在は「(地球) 環境問題とは人間活動の拡大による人間の生存条件の劣化」であり、「(人間とその文化を問うことなしに) 物質の挙措のみを追求しても適切な回答が得られないだろう⁹⁾」という認識の方が一般的である。ここでの人間活動とは、主としてその経済活動を指すのであろうが、科学活動も経済活動の側面を持っている。核技術の開発や遺伝子操作の技術、そしてそれらの産業利用のように、科学が巨大な経済活動と密接に結合

しているようなものも多い。したがって「……人間活動の拡大による……人間の生存条件の劣化」というセンテンスが「真」であるならば、「科学が進歩すれば、環境が劣化する」という、さしあたりの科学否定論めいたものが出てくる。これは今のところ冗談であるが、どこかの研究所で研究成果を追うあまりに、廃棄物の貯蔵施設を造ると言って付けてもらった予算を先端研究に流用し、あげくのはてに貯蔵施設から放射能を含む物質が漏れ出て環境が劣化したという話や、ある一群の科学者や技術者たちが蛸壺のなかから「我々はマジシャンでもクリミナルでもない」と言って居直っていたのが、原子炉修理のデータを誤魔化して、きれいなデータを提出しているのでは、これはマジカルでクリミナルであり、科学は美しい顔の悪魔であるという怖い話になる。

Heidegger や Uexküll の所説では、現に此处で生きている人間や人間を含む生き物たちについて、彼らの「身近な」「身の回りの」環境世界での基本的な在り様について述べられる。人間は、身近な身の回りで起こっていることについては、それに関わる強い動機を持つことが出来る。また遠くの地域で起こっていることであっても、それを自分の地域の具体的問題へと仮想的にでも移し替える場合には、人々はやはり真剣に取り組む。環境世界をキーワードにとって、関 礼子氏は、「地域環境問題」が地域の人々の動機を形成し、それが問題の解決に役立ったり、問題解決へ向けての行動を展開させたりしていること、遠く離れた地域の人々も、問題がかったの故郷、かつての環境世界の問題としてそれに関わる動機が形成される場合には、積極的に問題解決への運動に参加すること、等についての社会学的分析を行っている⁹⁾。

ところで言うまでもないことだが、いまや環境問題は地球規模になっている。個人の日常の個別問題でありながら、地球規模で人々に同一の問題を突きつけて、世界問題になっている。しかるに人々は、自分の日常をどの様にこの問題へ結びつけるかが不分明で戸惑っている。われわれは現在、日常生活における人間の通常の諸行為において、それらの諸行為を「地球環境問題」という世界問題の解決に結びつける結びつきを見いださない限り、問題の解決は出来ないという段階に入っている。「地球環境問題」解決へ向けての動機という、かつて人類が持ったこ

とのない動機を形成することが必要な段階に入ったと思われるのである。しかし持ったことのない動機を持つことが出来るだろうか？すでに人間が持っている動機で代替がきくのであろうか。Uexküll や Heidegger の思索から、ともかくもこの解に向けての示唆を得たいというのが、もう一つの目的、或いは我々の真の動機である。

II ユクスキュルの環境世界論における生物把握の仕組み

II-1 Uexküll における環境世界と世界の問題

Uexküll は、世界と環境世界について簡単に次のように書いている。

「我々を取りまいている (umgeben) 客観的現実を総体的に世界 (Welt), 我々を取りまいている主観的現実を総体的に環境世界 (Umwelt) と言い表そう」⁷⁾。

これはこれで終れば客観と主観を「……世界」で言い換えただけで、世界と言う言葉を使ったがために、人間については誤解さえ生みかねない。ただ人間以外の生物については、その生物がそなえている感覚受容器に捉えられている総体以外のもの (いわゆる das Ding-an sich といわれるものについての思弁) を考える必要がないし、感覚受容器にキャッチされている限りでの総体を環境世界と呼んだわけであり、その考え方を人間へスライドさせてくると、(これは単に私の推測に過ぎないが) 生物主体を人間主観へ読み替えるという事だったのだろう。これによって動物については、人間が具体的に捉えうるその動物の環境世界が、その動物の全世界だと言い張れるメリットがある。しかし主観と客観とで、環境世界と世界のイメージがすぐに出来たり、或いは世界と環境世界の入れ子構造を考えることが出来たりしたらそれは出来過ぎで、この言い方はほとんど使いものにならない。ただし主客の言葉を後ろに引っ込め、「世界」をより操作的な言葉である「環境」に置き換えると、Koffka, K が、ゲシュタルト心理学の主要な概念の一つとした、地理的環境 (geographical environment) と行動的環境 (behavioral environment) の概念に近いものとしてみることも出来る⁸⁾。

Koffka は、結氷し雪の降り積もった湖を、雪原と信じて涉っていく旅人を例に

挙げる。旅人の客観行動は、運が悪ければ湖中に水没するかもしれない危険度の高いものであるが、彼の心の世界での現象行動は、大地に抱かれている安全な旅なのである。これは例として印象的であるが、何時でも主観と客観がこのように対立しあっているわけではないだろう。これは極限の例である。

Uexküll は世界と環境世界は相互に矛盾していると書いて矛盾を強調する。しかし矛盾や対立が両者の構造の基本であって、両者が何時でも矛盾し衝突していることが第一義だと考えることは出来ない。外の天体からやって来たものでなければどんなに早くても地球と同時にしか生まれ得ない地球上の生物が、そのように進化しうるとは考えられない。環境世界は、場合によっては世界と矛盾するようにして、したがって環境世界で生きることは世界では生きられないこととして、環境世界では生として現象するが実際は死であることもあるとするのが Uexküll の真意であつたと考えた方がいいし、それはまた Koffka の例からの帰結でもあろう。ただ、Uexküll が環境世界というものを如何なる世界との対比で考えていたのかは解る。

Uexküll が環境世界と対比させた世界は (umgebenden objectiven Wirklichkeiten) と表現されている。鍵になっているのは subjektiven に対する objektiven (彼はこの場合は、「私という人間のことは配慮しないで、思惟において世界を考える」⁹⁾ という意味で使っているようである) である。これによって特徴づけられるとしたら、その世界の概念とはどういうものだろうか。かなり曖昧になるように思う。例えば、国家、会社、学校、銀行のようなものは、当のその組織に私が関係していないとすれば、「私のことは配慮せずに、思惟においてそれらは成立しうる」もの、つまり客観の領域に属するものだと思うが、これらが誰の環境世界にも所属しないということにはならないのではないかと思う。

Uexküll が世界 (Welt) と言うときには、それがどの様なものであるかについて、人々 (「私」という個人ではなく公共的に) がそれをどう考えていたのか、を考えていたらしいこと、人間を取りまく大地と大空についてその時代の人々がどんなイメージを持っていたのかを、つまりその時代の世界観 (ただし宇宙と宇宙における地球のイメージという意味である) を言っていたらしいことが判明する。

彼は、世界観について、その変遷があったことを言い、時代があって、その時代にイメージされている地球のことを「世界」とも言っているから、これはその時代に可能な最高度の測定と、測定で得られたデータに基づく地球についての理論、その時代の地球システム理論だということになる。測定はむしろその時代の科学的、公共的測定であり、世界とは測定によって対象化されたものの総体だと言え、現代の自然科学的世界観にも合致する。Uexküll が環境世界に対置した「世界」とは、その時代の自然科学が描き出した宇宙と、其処に浮かんでいる地球と、それについての公共的な知識のことであったと考えられる。

ところで、此処まで記述してきた世界と環境世界についての Uexküll の議論は、人間についてのものである。彼自身の手によって「人間についてのみ当てはめる」とは目にする限り書いていないが、人間以外の生物については、有名な機能環 (Funktionskreis) の概念を使って次のように書いている。

「いろいろな動物の機能環は、多様な仕方で互いに関連し合っており、生き物たちに、(互いに絡み合いながら) 共通する機能世界 (Funktionwelt) を造っている。植物も此処に含まれている。しかし箇々の動物は自分の機能環で自分自身の世界 (Welt) を造っていて、その中に自分の現存 (Dasein) を入れて鍵をかけ、それを完全に閉じこめるのである。」¹⁰⁾

すぐ次に述べるように、機能環の総体として構成されるものを、Uexküll は術語として環境世界 (Umwelt) と言っている。つまり上に引用した文章では、彼は気軽に環境世界の代わりに世界という言葉を用いているわけで、世界と環境世界とは区別されていない。人間以外の動物では世界とは環境世界のことであって、しかもそこに閉じこめられているという認識が示されている。世界概念の多様性について整理しておかなければならない人間については、こうした単純な取り扱いが出来ない。その事は後にみるはずである。また人間については、上の引用でみたように彼の主観的現実の総体を環境世界 (仮に 1) と言っているが、人間についても、すぐ次に述べるような機能環を考え、それらの総体としての環境世界

(仮に 2) を考えることは出来ようし、さらに人間の場合には機能環を持ち得ない主観的現実というものも多彩にあり得るであろうから、この (1) と (2) とは、完全には一致しないということになる。環境世界 (Umwelt) という概念を動物に適用する場合と、人間に適用する場合とで、そこに概念の不一致があつて、Uexküll も我々も、ある漠然とした領域で話をしているのだということは念頭におくべきだろう。Heidegger が、人間については、その身の回りの日常の生活しているところを<環境世界>と呼んだのは解りやすい。Uexküll の環境世界の概念は、Heidegger のそれに含まれることになる。<機能環の総体としての環境世界>という考え方は、人間についても当然のことながら適用可能と思われるから、それらの機能環から直接的に、且つ因果連関的に拡張していく客観的世界、それらをさらに意味連関的に読み替えて自分なりに表象していく主観的世界、それらを合わせたような世界、そうした世界を人間の環境世界と呼ぶことにすれば、それは我々の日常世界であろうし、Heidegger が環境世界 (Umwelt) と呼んだ世界と変わるものではない。

こういうわけで我々は、Uexküll の動物の環境世界での知見を、Heidegger の環境世界での知見と併置するし、場合によっては関連させる。つまり環境世界という概念を、人間と人間以外の生物とを通底する領域として確立できないのかという問題意識がそこにある。人間には人間以外の生物と共有する領域がある。生き物は人間を含めて彼の身の回りの「場」で直接的に生きている。

II-2 機能環と環境世界

上に引用した文章の、すぐ前にあるのが次の一節である。

「それぞれの動物はひとつの主体 (Subjekt) であり、外界からの全般的な作用を各自に特有の型で刺激として選び出し、各自に特有の仕方でこの刺激に応答する。この応答が再び特有の仕方で外界に作用し、外界の側であるところのその刺激に影響する。こうして一巡りの環が閉じるわけで、これを動物の機能環と呼ぶことが出来る。……」

……全機能環の連関を見てみると、刺激は明確な知覚標識 (Merkmal) を造っていて、甲板長が様々な海の記号を利用するように、動物の動きはそれ (Merkmal) に向けられ、それに操舵されている。このメルクマールの総計を、知覚世界 (Merkwelt) と呼ぶ。」¹¹⁾

……ここには Uexküll の基本的な考え方が簡潔に述べられている。先ず主体 (Subjekt) という用語であるが、彼は一頭の牛、一羽のカラス、一匹の蝶をも主体 (Subjekt) という。そればかりか「生きている細胞はそれ自身の Ichton (ego-quality) を持っている」とも言っている。主体とは「自らの知覚標識から造り上げている彼の (環境) 世界の中心にいる「自発性の中核」である」と、Jacob の息子である Thure von Uexküll は言っているが、こちらの言い方が少しは柔らかない。それでも両者共に生氣論へのかたむきは否めない。生氣論それ自体はおおいに考察に値するし、Uexküll の環境世界論はそうしたもののだが、中途半端な生氣論は感傷的な生物愛護論、さらにはオカルトをも生み出しかねないから、こういう言い方には注意が必要なのだろう。また先の節の引用文では、Subjekt を主観と訳出したが、それは先の引用文が人間についての言説だったからであり、主体と訳出しても誤りではないだろう。Uexküll においてはどちらも Subjekt である。

引用した文章で次に述べられているのが有名な機能環の考え方であるが、これが彼の理論の核心である。生物は、その種において特有の構造によって、周囲の外界からの働きかけを選択的に受容するという考え方は、後に比較行動学の領域で、鍵刺激あるいは信号刺激の概念として確立したし、働きかけに対する特有の作用があるという考え方は、固定的活動型あるいは広く本能的行動の概念として一般的になり、やはり比較行動学における重要な概念として確立した。大まかな捉え方をすれば、彼の理論は、生体を外界からの働きかけに対してある仕方で応答するシステムとして考える、ということであり、そのシステムへの入力を刺激、出力を反応 (作用) と考えることは、ごく一般的で目新しくもなんともないが、この「刺激と反応は環 (Kreis) をなして閉じるのだ」という考え方は、他に例をみない卓抜なものであった。

このことは、知覚標識 (Merkmal) という概念をたてることによって成立している。客体には刺激として生体に作用する部分があるが、生体はその刺激によって客体に知覚標識を付する。刺激という客体に属する要因が、(同時に)知覚標識という主体の側の要因でもあるとすることで、大げさに言えば主客対立の二元論が突破されてしまった。この標識に導かれて行動が展開する。行動は客体に行動標識 (Wirkmal) を付する。この行動標識が知覚標識を拭いさる。こうして円環が完結する。この段階で、知覚標識が付される客体と生体とを分けて、それぞれを独立に考えてみるということが出来なくなった。生体を周囲から独立したもの、少なくとも理論的には独立したものとして考えることから、さしあたりの理論構築を開始することは止める。現実がそうであるように、最初から生体とその周囲を一体のものとして把握するための理論化を行うことが開始されている。

これによって、生体はその周囲と切り離すことの出来ないものになった。切り離したときには、それは死体であって生物学の対象ではなく、物質科学や物質産業の対象になる。また生体は常に周囲と共にあり、生体が移動しても、機能環で結ばれたその周囲は常に存在し、如何なる意味でも生体はその周囲と関係を持たなくなるということがない。つまりその外部 (必ずしも距離を意味しない。関係の意味である) に出るということもないのである。生体はその身近な周囲にそのように棲みそのように馴染んでいる。生体はそのような存在構造を持つのである。このことは、後に取り上げる Heidegger が「世界=内=存在 (In-der-Welt-sein)」の用語によって現に生きている人間を把握しようとしたことと近い。ただし、世界=内=存在という言葉は、本来は現存在に、つまり生きて動いている人間のみに用いる Heidegger の言葉であり、＜開示態 (Erschlossenheit)＞である人間が、現象的にあるいは実体的に開く場面が＜世界＞であるのにたいして、人間以外の動物が＜開示する＞ことはないから、彼らは世界=内=存在でもない。したがって、この用語を生物一般には使用しない。しかし機能環で環境世界に結びつけられている生物と、＜世界＞と一体である人間とが、同型であることを否定しうるものではないと思っている。

II-3 重要な機能環

Uexküll は、次のような設問を出して、次に自分でそれに簡単に答えるというやり方で、環境世界論の具体的な作業が何を指すかを述べる。「人間は動物の感覚を知りえないし、当然またその動物の環境世界の諸事物がどんな知覚標識として構成されているのかも知りえない。従ってそれを探り出す何か特別の方法があるのだろうか」。

答えは「それはたいして難しいことではありません。動物とその環境世界との関係は四とおりあり、簡単に区別できます。すなわち環境世界の事物は、媒質[生活の場となる物質]、敵、獲物、そして性のパートナーに分かれるのです。ですから、ある動物の環境世界に接近しようとするには、まず、諸事物がその動物にとって、これらの関係のいずれを示しているのかを問えばいいわけです。」¹²⁾ということだった。これは学生の間に理由を示しつつ説明し、それに答えていくのではないようである。信者の疑問に対する教祖のご託宣のようである。

TheoreBiol '28 においても事情はおなじである¹³⁾。各種機能環をグループ分けしていくときの、最初の環は媒質 (Medium) の環であるという。彼は媒質ということで、空気や水や土を例にあげている。さらに、媒質は動物に刺激を及ぼさないこと、逆に媒質の除去が即座の刺激作動を引き起こすことを述べている。またこの場合の媒質には知覚標識 (Merkmal) が付いていないことも述べている。知覚標識が存在しないで、それでもっていかにして環を形成するかは、その事自体が問題になると思うが、テーマではないのでスキップする。地面と全ての堅いものは媒質中の障害物になり、それらは Merkmal として作用することになる。また媒質は、多くの場合特定のメルクマールによって空間的に制限されて、動物の原住地 (Heimat) となる。Heimat は Uexküll が用いた用語である。現在では (Habitat) を使うべきであろうが、この用語はやや後の世代のものであるから、ここで使われなかったのは当然として、Heimat は擬人観が過ぎる言葉でどうかなと思う。生物学や博物学で擬人観的な表現を廃し、それらを客観的、中立的な用語に置き換えることを主張していたのは、若い頃とはいえ、彼自身である。

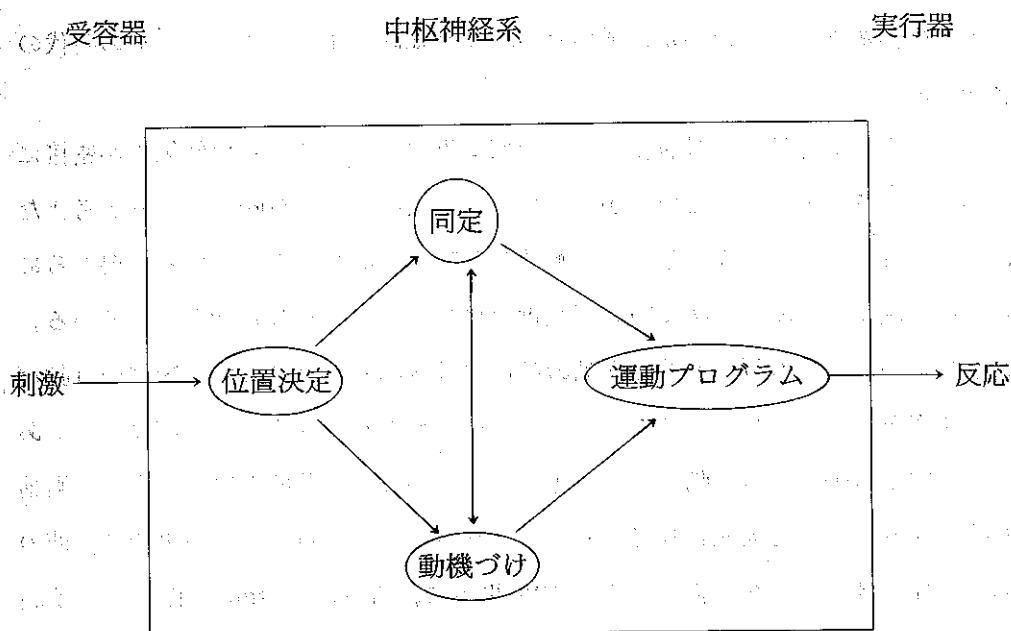
媒質の環の隣に、エサ (Nahrung) の環と天敵 (Feind) の環が区別される。四

つ目に性的機能環 (Geschlecht) が言及される。これは原理的にはエサの機能環と同等であるが、節食装置の替わりに性の装置が作動するのであるとしている。以上が教祖のご託宣である。

このように彼が主要な機能環としてあげた四つのものには、その充足が個体の生存、さらには結果的に種の存続にとっても有利に働くという、個体にとっての基本的な要求を満たすための機能環であるという共通の特徴がある。これらの機能環は要求、欲求と、やや操作的に言えば動機づけ要因と対応している。機能環はむろん生物の行動モデルの一種である。現代風に言えば、動機づけ要因を抜いてしまって、それでも一般的であるような生物の行動モデルは作れないと思う。比較行動学においては、動機づけ要因は、実行行為として具体化する固定的活動パターン、環境の一部を鍵刺激として特定化する選択的刺激炉波の二つの要因と共に、生物の行動システムを形成する主要な三つの下位システムの一つである¹⁴⁾。行動の大枠についての、神経行動学における一般的な立言、ならびにその図式的な表示を、以下に例として示しておこう。

「動物や人間の行動は、相互に結合しあった神経細胞集団のなかで実行されるデータ処理に基づいている。……神経情報は中枢神経系回路網によって、意味あるプログラムに整理され、そして特定の筋肉群に伝達される。筋肉はそれに従って規則正しく収縮し、運動或いは行動を起こす。この運動プログラムを活性化する司令は、中枢神経系から発せられるがそれはまた内分泌系によってもいろいろな影響を受けている。運動司令の実行—行動反応は、感覚系の制御も受けている。……司令は、しかるべき感覚情報処理機構によって処理された環境のなかの特定の信号刺激によっても引き出される。……しかしこの外界の刺激が実際に行動を開発するかどうかは、衝動あるいは動機づけとよばれている内的生理条件によっても大きく影響される。」¹⁵⁾

この現代の神経行動学における人間や動物の行動についての大枠での考え方と、Uexküll の機能環の考え方を比較してみた場合、現代のモデルはより操作的で作



第1図 中枢神経系での情報処理とその結果としての反応についての模式図

業仮説的になっていて、精密になっている点は指摘できても、Uexküll が提出した最も重要な考え方である知覚標識 (Merkmal) の概念が消えてしまっている。また彼の掲げた問、「ダニは機関士なのか、それとも機関車か」にたいしては、「機関車である」という、彼からすればいずれは脱線するはずの支線の方へ入り込んでいるようにも見える。つまり本質的に重要な発展というものが、この間にあったのかという疑問があるが、それに目をつぶれば、両者に矛盾する点や大きく異なる点があるようには思えない。機能環のモデルには、衝動あるいは動機づけの項が、術語とし明確な形をとってモデルに入っていないが、これは主体の内的世界 (Innenwelt) という概念に組み込まれて、統合的に考えられていたとみるべきであろう。

Uexküll が機能環の種類の分類に使った基準は、みたように明らかに衝動の種類である。しかるに衝動や動機づけは、それが生体に完全に外在する要因になるはずはないから、衝動や動機づけは機能環に内在し且つそれを構成する重要な構

成要素だった筈である。彼がそれをモデルに明確な形で組み込まなかったのは、モデルの複雑さを嫌ったのか、或いは単にまだ知識が不十分であったその時代の制約であったのか。

Uexküll は、生物の身体構造と、その環境世界となっている自然世界が密接に相関していることを説いているが、このことは次のことを意味していると考えたい。生物は彼の衝動を充足したり、解放したり、放散したりしている。要するに衝動を解決する一組の連関を彼の環境世界に見いだし、それに働きかけている。しかし、彼の知覚も行動も彼の衝動の範疇の外へ出ることはない。知覚や行動が衝動を変形したり、肥大させたり、ときには逆転させたりすることがないのである。知覚や行動よりも衝動が重く大きい。したがって、環境世界は生物との衝動相関的なものとして構成されている。つまり彼の衝動に対応しない事物は、彼の環境世界には出現しない筈である。「環境世界に、自らの Dasein を閉じこめる。」とは、そういう意味であると理解する。

Ⅲ 人間にあるのは世界であって環境世界ではないという説

Ⅲ-1 上の意見に対する Lorenz, K. Z. の反対意見

Lorenz, K は、動物の行動をその現場で観察し、時には実験もする第一級のフィールドワーカーであり、動物行動の理論家としても極めて優れた研究者であった。人間の認識についても、仮説的实在論 (Hypothetische Realismus), 或いは進化論的認識論 (Evolutionäre Erkenntnistheorie) の立場での意見があった。彼は次のように言う。

「自然科学者にとって人間とは、彼の認識力というその高度の能力をも含めて、いろいろな特性や機能を進化によって手に入れたある一つの生物である。進化というこの無窮の発達過程のなかですべての生物は現実の所与 (Gegebenheiten) と対決し、それに適応 (angepaßt) させられてきた。……動物や人間の行動 (Verhalten) も、それが環境世界 (Umwelt) に適応している行動である限り、環境世界の像である。……因果性とか実体性とか時間と空間とかの、ものの考え方や見方のため

の<いろいろな眼鏡>は、種族維持のために生じてきた感覚神経的な機構が備えるにいたった諸機能である。……人間に周囲の世界を体験させる多くの様々な生理的装置のまともりは、様々な種の動物においてその個々の種のすべてにとって重要な環境世界の事物を<経験へ持ち込んでくる (in Erfahrung bringen)>装置のまともりと同等であると見なすことが出来る。」¹⁶⁾

したがって「世界との多様な条件のなかで、予見と計画によってその条件を変更し自己を維持していく人間、その人間と世界との関係の把握には環境世界概念 (Umweltbegriff) は不必要で時には誤解をもたらす」¹⁸⁾とする Gehlen, A の主張には、「人間は如何なる環境世界をも持たないとする、まったく人を誤らせる発言が多く著者によって語られているが、とくに Gehlen, A において著しい。」¹⁷⁾と書かざる得なかった。たしかに人間は知覚と表象の働きによって、直接的な環境の拘束を乗り越えて「世界を構成する」生物である。このことを他の生物と人間を隔てる人間のみの特性として喧伝し、更には他の生物に対する人間の優越性として、これを無意識のうちに人間中心主義のイデオロギーにしてきたのかも知れないし、またこの点を強調するあまり、人間もまた他の生物と同様に彼なりの環境世界を持っていることが等閑に付されてきているのではなかろうか。進化論の立場に立てば、予見性や計画性が何かと何かの断絶を保証する絶対的な条件になるなどとは、とても考えられないことだろう。人間のどんな点に着目したことが、人間を環境世界ではなく世界に位置づける事になったのかを少しみてみよう。

III-2 Scheler, M の「世界開放性」の概念

Gehlen, A の主張を彼の言葉で端的に述べれば、「ある生物にとって内容の充実した全空間と全時間とが開放されているならば、この生物には環境 (Umwelt) はなく、世界があるのである」¹⁹⁾ということになるが、彼はこの所説を独自に言い出したのではなく、主張の中核を Scheler, M に負っている。Gehlen, A は「Scheler は従来からの心身二元論の中心を少しずらして、精神 (Geist) と心身の二元論にただけだ」と述べていて、この批判は当たっているとは思いますが、人間が生物で

あることを承知して、その上で「内容の充実した全空間と全時間」という、もしかしたら神様にしかあり得ないような概念を持ちだして、これが基準となって人間が＜環境世界ではなく世界へと差し向けられている存在＞になるという考え方は、人類の気取りの極地に到達したような気がするが、＜世界へ向けられている人間＞という考え方は、別のかたちで既に Scheler, M に現れている。

「宇宙における人間の位置」²⁰⁾と題する書物において、Scheler, M は人間の独自性は、人間の生物的・心理的な構造の全貌を精査して初めて明らかにしうるものだと述べて、植物、動物、人間のそれぞれの生理・心理的な＜生＞の発展段階の記述を始める。このことを彼は当時の個別科学、とくに生物学、心理学、精神分析学からとった知見を取りまとめることで進めていくが、それはそのことを通じてまたその延長上で、人間について神と比較するのではなくて、人間以外の生物（植物・動物）と比較して、そこからそれらとの本質的な相違を問おうとしたからである。

Scheler, M によれば、人間を人間たらしめているのは、彼の知能でも、想像力でも、記憶力でもない。知能、想像、記憶、あるいは選択能力や道具の使用にしても、動物と人間の間には程度の違いがあるだけで、原理上の違いがある訳ではない。Scheler, M が原理としてあげたものは「言葉の最も広い意味で＜生 (Leben)＞の＜外へでるもの (außerhalb)＞」²¹⁾であった。彼はそれを精神 (Geist) と呼ぶ。この精神の概念は理性の概念を含み、さらに本質直観や随意的で情緒的な行為、例えば親切、愛、同情、尊敬、絶望を含み、それらの行為の中心にある人格であって、機能的な生を中心である心理的な人格とは鋭い対比をなすとする。

精神 (Geist) を彼のように規定すれば、精神を備えた人間は生の内にあつて且つ生の外にも出ていることになる。精神的存在者はもはや生 (Leben) への依存からは解放され、衝動 (trieb) や環境世界 (Umwelt) に呪縛されることがなく、それからは自由になって＜umweltfrei＞であるという。彼は環境世界を対象にしてそれとの間に距離を置くことが出来る。また事物に対してそれとの関わりの中に現れる利害を脇に置いて、事物それ自体の性質によって認識や行為を規定するという。このことは、彼が自らの＜生＞の世界、生物学のいう、種において規

定されている動物 (Tier) の狭い環境世界を抜け出て、広大な事物の世界に在ることを意味しているという。彼はそうした行為の形式を「世界開放性 (Weltoffenheit)」と呼んで、環境世界束縛性 (Umweltbannes) を振り払う原理であるとした。

この概念は Heidegger に影響を与えたと言われる。Heidegger もこの用語を使う。人間は環境世界のくびきを振り払って世界を構成してゆく。世界開放性とはその事を指しているのだろうが、それはなにも<生>の外にある<精神>の力によるものだとは、Heidegger は考えていなかったと思う。彼によれば人間は(この文脈ではこれを{人間の<生>}に読み替える)、既に開示態である。人間は<開示されている>から共存在であり、開示のありさまによって世界はそうように構成されていく。世界は可能性であり、世界像である。世界は<生>が生み出す<精神>を示すことはあっても、<生>と切り離された<精神>がそれのみで原理として存在しうるとは考え難いことである。

このように Scheler, M は精神 (Geist) という言葉に、生の外にあるものという概念を与えることによって、精神をも備えた人間 (M) は動物 (T) のように環境世界 (U) に閉じこめられることがなく、其処での生の外へでて世界 (W) に開かれているとしたのであるが、彼はこのことを簡単に次のように表している。

$$T \rightleftharpoons U \qquad M \rightleftharpoons W \rightarrow \rightarrow$$

ところでこの議論において、結局のところ人間はどういうことになるのであろうか。彼が言うように、愛や尊敬や慈愛や絶望さえもが<生>の外にあると簡単に言えるのであろうか、むしろこれらが密接に<生>に絡むところに、人間の問題があるのではないのか。世界に開かれ、広大な精神の世界を構成してゆく人間、人間にそのような面があることを、誰も否定することはないだろう。Scheler はその事を肯定的に感じていたであろうし、上行していくイメージの人類に、絶対者や唯一者や全能者を無意識のうちに重ねていたのかも知れない。しかしこの同じ事を、<我々人類は限りなく絶対者に近づいていく>ということをし、その時代のマルセイユの港で、苦力として這い蹲って荷役に従事していた中国人が言うであろうか。北アメリカでガラガラのバスのなかで、座ることも出来ずに苦痛をこらえ

て立っている黒人が言うであろうか。これは今世紀初頭のヨーロッパ人とその流れを汲む北アメリカの白人の、そのころの尊大な精神的状況、彼らの＜世界＞を表しているのではないのか。

広大な精神の世界は、当然にも広大なく悪い＞精神の世界にもなる。我々は神に近づいているという心理は、そう思っている人間が当然にも神でないが故に、意識的無意識的に差別の心理を生み出す。スウェーデンで、障害者が子供を産むことを禁じた＜法律＞が作られたのは1935年であるという。ナチズムは戦いで失われた領土 (Umwelt) を回復したいという国民感情 (精神) にも強く訴えたという。このとき人間はどんな＜Umwelt＞から開放されて、どんな精神の＜世界＞へ目指されていたのだろうか。

III-3 人間については環境世界を否定する Ghelen

先に見たように、Gehlen, A も「人間に環境世界 (Umwelt) はなく、世界 (Welt) があるのみである」¹⁹⁾と主張するが、彼は Scheler, M のように、人間には＜生の外にある＞という側面がある、という事からそのことを主張するのではなく、彼は環境世界 (Umwelt) の概念が人間には適用できないと考えている事から、それを言う。彼は環境世界 (Umwelt) を次のように定義する²²⁾。

1. 環境世界 (Umwelt) とは、一つの圏 (Sphäre 或いは Umgebung) からの一つの部分 (Ausschnitt) である。
2. それは一つの特異な、また同時に安定した複合体を形成する。
3. それはそれぞれ一つの種に関係し、或いは交換可能と考えられている個体に関係している。
4. 環境世界 (Umwelt) は移調可能ではない、即ちどんな動物も他の動物の環境世界のなかに配置換えになることはない。

この定義での圏 (Umgebung) というものを、物理化学的な法則にしたがって互いに結合し合っているものの総体と考えれば、この多様なものの内から、特定の生物がそれぞれの独自の組織によって自己保存に必要な条件の総体をなすもの

を複合体として選び出してくるわけで、それを環境世界(Umwelt)と呼んでいる。これは既にみてきた Uexküll, J の、環境世界の捉え方と同等であるようにみえるが実は一部で因果が逆転している。Uexküll は、ある個別の種の機能環の総体を環境世界と言ひ、結果として環境世界は移調が困難な世界として現れたのであり、移調不可能性が環境世界概念の理論的前提になっているわけではない。また Ghelen は、一つの圏(Umgebung)からある仕方で選び出されてくるものの総体として、環境世界を考えていて、この圏についての公共的観念、つまり自然観を Uexküll の方は世界と呼んだ訳で、両者は出発点を等しくしている。後に見るが、Ghelen は自然を文化で修飾したのである。文化は決してコズメティックではないのに。

それでは彼はどのような理由で、この定義は人間には適用できないと言ったのであろうか。この定義(Uexküll の場合も結果的に同じになるが)では、種はそれに固有の特殊な、且つ一定の環境世界を構成する。つまり環境世界は種に対しての一定の複合体として定義されている。しかし人間については、そのようなものを考えることが出来ないと Ghelen は言う。①人間については、この種が自己保存のために満たさなくてはならないような条件を指摘することは出来ず、人間という「種」は至るところに生きているのが見られると言う。上の条件に合致するような環境世界は人間については存在しないと言うのである。②また動物の個体は交換可能と考えられているが、種としての人間が様々な環境世界を往来する事が出来ても個体は往来できないことがあること、つまり単純な生活の水準ですら交換可能でない場合があることを指摘している。

これは1935年頃の考え方であり、人間を特別なものとする傾向の強かった当時にはごく一般的なもののみかたであったかのも知れない。彼は何処にでも住んでいる例としてヨーロッパ人を挙げている。「われわれ民族の膨張発展は三大陸を我が物とし、比較を絶する文化上の業績のおかげで空中、いな成層圏、および水中にたとえ一時的なりとも滞在を許す技術を開拓するに成功した。南極地帯を利益圏に分割することは既に将来を見越しての政治的企図である。この技術—それは確かに文化である」²³⁾。この勝利宣言の虚しさと、裏にある優越感や差別意識についてはべつに何も言う気はないが、ホンの半世紀ほど前の、ヨーロッパの知識

人の精神的状況というものは知っていてもいいだろう。

さて①については、今日ではまったくこれを受け入れることが出来ないのは明白である。地球環境問題とは、(上で使った用語で表現すれば) 圏 (Umgebung) が人間が住むに適さないものになりつつあるということであるから、其処から選択した複合体に、必ず一つは人間が住むに適さないものになりつつある複合体があるはずで、どの複合体にも人間が住めるという①の立論は今日では成り立たない。また何処にでも住むためには、人間は何処をもある一定の範囲では安定している空間に作り替えている訳で、それが彼の環境世界の中核である。水中には潜水艦で進入し、砂漠には天幕を張り、極地には快適な居住区を建設する。環境世界とは、其処へ人間が類として進出している多様な圏 (Umgebung) のことを言っているのではない。

Gehlen, A. は②については、種或いは交換可能な個体として、種と個体をくくることが、人間では出来ないということを言う。その例として、アボリジニーの家族はニューヨークでは生活の維持が出来ないだろうと言う。種として人間は何処にでも進出しその意味で交換可能だが、個体はそうではないと言う。しかしこの例では、交換可能の概念を適用する領域を彼は踏み越えている。交換可能とは、この定義ではある環境世界 (Umwelt) の内部で考えられていることで、別々の環境世界間で考えられていることではない。またアボリジニーの家族が、ニューヨークで生活できるか出来ないかは、そうでもあればそうでもない完全にアクシデンタルな話で、議論を振り分ける例としては不適切である。種と個体がくくれないという議論は、個が違えば或いは民族が違えば、[人間]が違うという議論になりやすい。

さらに、一般的に人間についての交換可能性 (交換とは、ここでは互いに異なる状況での、人体の丸ごとの入れ替えと、人体の部分を他からもってきて入れ替えることを指そう) ということについて言えば、人格としての人間が交換可能でないことは言うまでもない。しかし、全ての個人を現存在 (Dasein) として、その尊厳をはっきりと認識できるようになったのはごく最近のことである。人間が交換不可能性を示すのは、全ての個人の人格の尊厳が確立することと同義である。

シュバイツァーとアフリカ人は交換可能でなかったが、そのときアフリカ人どうしはどうだったのだろうか。北欧諸国での障害者に対する法による様々の規制は、障害者と非障害者の交換不可能性を言うことで、障害者どうし或いは非障害者どうしの交換可能性を隠喩している。

生の事実としての人間、つまりヒトは、現在にいたって遂に交換可能性を示すようになり、さらにますます交換可能性を高めている。人間がヒトになったとき、ヒトとしての〈生〉のぎりぎりの水準で交換に応ずるかどうかが、ドナーカードへの記入として現実問われているのである。

人格は交換不可能である。しかしヒトはそうではない。したがって人間は交換不可能と簡単に言い切ってしまうことは出来ない。人格の交換不可能は一つの理念であり目標であり、人類はそれを目指す。同時にヒトは交換可能性を示し、医療の場面ではそれも目指されている。人格の尊厳を些かも損ずることなく、しかもヒトの交換可能性をどのようにして現実化するのか、解答は得られていないが、人間は交換不可能と言ってふんぞり返っているわけにはいかない。

Ⅳ 環境世界での人間についてのハイデガーの思索

Ⅳ-1 世界＝内＝存在として把握された現存在

Heidegger は「存在と時間」の序論において、現存在²⁴⁾には既にある種の存在了解 (Seinsverständnis) が備わっていると述べ、存在を主題とする存在論的研究とは、まずこの通俗的な存在了解を抜け出ていくことである (存在了解を止めるという意味ではない。存在了解を存在論的に純化するという意味である) としている。「この大まかな漠然とした存在了解は、ともかくも一つの既成事実になっている」²⁵⁾とされる。現存在は、なにかが「ある」ことを漠然とであれ了解している。そして「現存在には、本質的に「何らかの世界の内に存在する」ということが属している。したがって現存在の本来の性格である存在了解は、同じように根源的に「世界」というようなものの了解と、世界の内部で近づける存在者の存在についての了解に及んでいる」²⁶⁾とされる。現存在は、漠然とであれ何か「ある」を感じ、それと共に、自分がそこにいる「世界」と呼びうるようなものを感じている

とされる。これが Heidegger の思索の出発点である。普通の人間が、「私は誰、どうして此処にいるのだろうか」と問い始め、無口になって周囲を見回した感じと何も変わらない。

世界＝内＝存在の用語は、存在了解についてのこの程度の説明の後に、いきなり現れるから、まるで天から降ってきたもののように言われることがあるが、見たように、存在了解している現存在の在り様を存在論的に術語化したものだと見なすことが出来る。そして現存在をこのように世界＝内＝存在と術語化するに当たっては、彼に流れ込んでいくその時代の思索の歴史があったと、木田 元氏は述べている。木田氏は「世界内存在というこの概念の形成に同時代の実に多様な思想が与っている……Heidegger の頭のなかでそれらの思想が複雑に交錯し、「世界内存在」といういかにもこなれの悪い、しかしそうとしか言い表しようのない概念に結実したのではあるまいか。」²⁷⁾と述べて、そのように彼に影響を与えた思想家、研究者として、Husserl, Scheler, Uexküll などをも挙げている。(つまりこの論文は、木田氏のこのスケッチに枝葉末節をくっつけて、やや細密に模写してみたものとも言える。)

Heidegger は「存在と時間」では、一言も Uexküll に言及していないが(これはフェアでないと思う)、彼は Uexküll の環境世界論を知っていた。マールブルグ大学での1925/26年の冬学期の講義録に、生物と世界の関係を主題的に取り扱った研究者として彼は Uexküll の名前を挙げている。そして「(世界の＝内にあること)という現存在のこの存在規定は、ある世界を持つことという(動物も植物も一定の環境世界(Umwelt)を持っていると考えられるから)一般的類規定の一つの種規定にすぎないのではないのか」²⁸⁾という設問を出してみて、こうした理解(一般に生物について、その環境世界を考えることが出来る)が可能になるのは、現存在についてそのこと(現存在は世界＝内＝存在であるということ)が理解されいて、はじめて動物や植物にも、その理解が及ぶのだと述べて、生物学が生物学にとどまる限り、生物学はこの概念を獲得する可能性の内にはないことを言っている。Heidegger のこの言明は、事の次第の一部分は正確に射抜いている。自らが世界＝内＝存在ではなく、また世界＝内＝存在の概念をかけらも持っていな

い生物が、他の生物の存在規定が内＝存在であることを指摘する可能性は全くない。ただしこの言明が、学問の個別の領域について述べているところはとても賛同できない。生物学者が生物について、生物学者自身の内＝存在を基礎構造にして、生物についてそれを立論することには何の不思議もない。したがって Uexküll は一般に生物が環境世界を持つことを、彼自身が世界＝内＝存在であり、漠然とあれその事を感じていたが故に（何故なら、存在構造が世界＝内＝存在であり、且つ自らについて自覚しうる生物が、自らの存在構造が、言葉は何であれ世界＝内＝存在であることを完璧に自覚しないということは、まずありそうもないから）、それを言うことが出来たのだと思う。Uexküll は Heidegger が言う意味での哲学者になって哲学的言明をしている。生物学が生物学にとどまり、それ故に生物学者が生物学者であり続け、その生物学者が、生物学として哲学的思索を行い、それもまた生物学の内容であるとしてそれを発表して何か不都合があるだろうか。哲学者に可能なことは、哲学者でない全ての人間にも可能である。Heidegger は、事態がそう進んできていることを、時間的には後から指摘した。この前後した客観的な時間の順序は、Heidegger 自身の手によって記述されるべきであったろう。さらに1929年のフライブルク大学冬学期での講義では（「存在と時間」初版出版の2年後である）、彼は屢々 Uexküll の業績に言及し、それは講義の主要なテーマにさえなっている²⁹⁾。

この世界＝内＝存在の概念は、Scheler, M の世界開放性の概念を突破している。Scheler による世界開放性の概念は、見てきたように＜生＞の外へ出る＜精神＞によって可能となる世界であり、それだけで既にやや腰の浮いた感じがするが、そこには人間が、ある予定されているより上位の世界へ進んでいくというイメージがあり、それがどんなものであれ（魅りが信じられていたり、殺人が正当化されていたり、総会屋へ上納金を払うのが仕事のうちだったり）世界とは既にそこに在るものではなく、人間が創っていくものだというニュアンスは強くない。

一方、Heidegger は、人間は＜開示 (Erschlossenheit)＞であるという³⁰⁾。それ故に人間は共存在であり、人間は人間の開けの場として＜世界＞を開いていく。＜世界＞は彼の存在性格である。そして彼はその＜世界＞で内＝存在である。人間

は、Schelerが言うように、ある<世界>へ開かれていくのではない。彼は彼の<世界>を開いていく(erschliessen)のである。世界開放性とは、人間の<生>の事実として、人間が<開示>を示すが故に、彼が<環境世界>からは開放されて<世界>を開くことが出来ることのその謂いになる。

人間が<開示態(Erschlossenheit)>であることを指摘したことは、Heideggerの最大の哲学的貢献と思う。人間は誰しもが<世界>が開けているという幼い日の最初の記憶を持っている。時間的には、それ以前の<生>というものがあるにもかかわらず、それ以前には<世界>が開かれているという記憶がない。これは記憶の問題だろうか。そうではあるまい。コンピューターは圧倒的な記憶容量を誇り、それを駆使して情報処理を行い、大抵の人間はチェスでも将棋でもコンピューターには負ける。しかしコンピューターが、「世界が<開かれている>」という経験を持つことはない。人間は生物の<生>から、世界が<開示する>人間の<生>へと進むのである。

さて、自らが開いた<世界>で、それに対してまったく関係を持たないということはある得ないから、彼はその<世界>に内=存在である。このように世界=内=存在の概念は、世界開放性の概念と矛盾しないし、彼が何処でどの様なく世界>を開こうとも、彼はそこで世界=内=存在である。世界開放性の概念は、このように世界=内=存在の概念に包み込まれてしまう。

現存在が世界=内=存在という存在規定を持っているという表現は、生物は環境世界を持っているという表現と、もちろん同一ではないが、同型の表現である。人間が主題となっている場合、それはいつも内=存在であるという。内=存在とは、空間的に内部に含まれるかどうかということとは、本来は無関係である。<in>は、Heideggerに従えば、<innan>から派生した語で「棲む」「滞在する」を意味し、さらに<an>は「……に慣れている」「……に親しんでいる」を意味するという。<内><in>で、「……に慣れ親しんで棲んでいるところ」が術語的に表現されていると理解できる³¹⁾。つまりいま問題にしている主題は、それがいつも慣れ親しみ、それに棲み慣れている……(その事や、その場所や、その人や、その他諸々)と切り離して把握することは出来ないことを言っている。人間以外の生物では、

それが環境世界に閉じこめられ、それから離れられないでいることが主張される。この場合には、＜空間的に世界の内部にいる＞ことが含意されているが、もちろんそれが内＝存在の概念と矛盾している訳ではない。

（ただし、人間以外の生物に世界＝内＝存在の概念を当てはめることは、適当でない。世界＝内＝存在の概念は、もちろん Heidegger によるものであり、彼はこれを実存範疇 (Existenzialien) とした。実存範疇とは、現存在の実存構造についての現象学的分析によって得られるものであるから、現存在（生きていま此処にいる人間）でない存在者に適用することは出来ない。にもかかわらず上述のように書いたのは、世界＝内＝存在という人文・社会科学における人間理解の根本をなす概念の成立に、環境、或いは環境世界という生物学の概念が強い影響を与えたに違いないということを、両者が似ているということを強調することで暗示したがつたからである。Heidegger は、現象学の手法によって、環境世界の概念を人間専用に作り替えたののかもしれない。だとすれば世界＝内＝存在の概念は、人間中心主義的なもの (anthropozentrisch) だと言えなくもないが、ここには Scheler の世界開放性の概念のような、脳天気な人間中心主義はない。

ともあれ世界＝内＝存在 (In-der-Welt-sein) の用語は、存在了解というそれ以上の説明は出来そうもない手短な前置きの後に、アプリアリな原理として忽然と現れる。Heidegger は「現存在の準備的基礎分析」の冒頭で、「現存在については、その世界＝内＝存在という基礎構造を露わに示さなければならない。これは現存在の解釈にとって「アプリアリ的な原理」となる構造であるが、単に寄せ集めてできた性質ではなく、根元的に且つ恒常的に全体としてそなわっている構造である。」としている。さらに「現存在の存在規定は、我々が世界＝内＝存在 (In-der-Welt-sein) と名付ける存在構成を元にしてアプリアリに見届けられ、かつ了解されなければならない。」²²⁾とされている。つまり現存在はそれのみで単独に把握されることはなく、現存在を言うときには、それが何であれ現存在が＜世界＞として構成するものと同時に、且つ現存在はその＜世界＞の内にあるもの、それに馴染んでいるものとして、現存在もそのことを了解していることとして把握されること、そのことが根底的基盤とされている。

遺伝子や蛋白質や、それらの分子構造や元素組成から始めて、それらを体系的に組み合わせつつ構成し、誰もがそれであるヒトだけを記述するのではなく、それとは別の生きている人間の記述の仕方、意識に現れる現象に語らせるのみで記述されていく人間、つまり対象化しえない私自身のこと、それでも時に語り合うことができ時に理解し合える私たちのこと、そうしたことが、これまでの精神科学とは比較にならないぐらいの厳密さで開始されたと人々は感じた。この概念はその後の心理学、社会学、精神医学などの人間諸科学の重要な基礎概念になっていく。

IV-2 環境世界における現存在の存在規定

Heidegger は「存在と時間」において、世界=内=存在を、その構造的契機である<世界>に即して分析する事から始めようといひ、多義的な<世界>の概念をさしあたり以下に示すような4とおりに整理した³³⁾。我々が寝覚め、歯を磨き、飯を食って、……寝るという日常の生活をしている地平をも<世界>と呼んで、その概念に加え、それを「世界の世界性」を問う出発の場面と定めて、そうした<世界>を<環境世界 (Umwelt)>とよんだ。

1. 世界は存在的概念として用いられて、世界の内部で存在しうる存在者の総体を意味する場合がある。
2. 世界は存在論的用語として用いられて、1. であげた存在者の存在を意味する場合がある。
3. 世界は存在的概念であるが、今度は事実的な現存在が現存在として「その内で」「生活して」いる<ところ>を意味する。この意味での世界は公共的な「我々の世界」を指すこともあるし、身近な(家庭的な)環境世界 (Umwelt) を指すこともある。
4. 世界は世界性という存在論的=実存論的概念を表しているとして捉えられる場合がある。

Heidegger は、世界＝内＝存在を、ひいては＜世界＞をも、先ず手始めに現存在の最も身近なあり方としての平均的日常性の地平、彼の＜環境世界＞において、先ず分析論の主題にしようという。

「……日常的現存在の最も身近な世界は環境世界 (Umwelt) である。我々の考究は、この平均的な世界＝内＝存在の実存論的性格である環境世界から出発して、世界性一般の理念への道をたどる。そして、環境世界の内部で身近に出会う存在者たち (inner-umweltlichen Seienden) を存在論的に解釈することをつうじて、環境世界の世界性を求める。」³⁴⁾

存在そのものを問うことが彼の設問であったが、この目標への道筋にまず最初におかれた問が「そのような問を問う存在者の存在如何」ということであった。そしてその事が下線部（下線は筆者が引いた）のように実行されるわけである。この論文は彼の本来の問には関わらない。彼も終にその本来の問に答えることはなかった。しかし本来の問のための問への現象学的解答の試み、つまり下線部の実行は重大な人間論を産出した。最初に明らかにしたように、ここが我々の注目する部分である。以下にその事を見ていく。

「……世界＝内＝存在はまた、世界の中で、そして内世界的存在者とかかわる＜やりとり＞ (Umgang) とも呼ばれる。＜やりとり＞はいつも配慮 (Besorgen) の多様なあり方のうちに散在している。」³⁵⁾

この節は環境世界のなかで出会う存在者の存在について分析する節の、冒頭の部分であるが、現象学的分析のためには、先ずは日常的な世界＝内＝存在を手引きにする他はないから、彼は世界＝内＝存在について語りはじめる。それでいてここには大枠での結論がすでに述べられている。現存在が世界＝内＝存在であり、＜開示＞であることは、当然にも他の存在者との＜やりとり＞が常にあるわけで、この＜やりとり＞はいつも Heidegger が配慮 (Besorgen) と名付けた様態のうち

にあり、その有様で環境世界の存在者と＜やりとり＞しているのである。このことは、いま此处で生きている人間が、洋服を着たり、飯を食ったり、ドアを開けて廊下へ出たり、隣人と話をしたりしていることを、科学の言葉でなく、日常の言葉で記述すればこうなるというその事である。(Besorgen)は一般に配慮と訳語がつけられているので、それをそのまま用いたが、配慮といつても、いつもいつも＜特段の配慮＞をしているわけではない。とにかく何かをするから（何もしないつもりになっていることも含めて）、その方向へ気が向いていたり、身体が向いていたり（方向だけを言っているのではない、内的傾斜を含めて傾斜を言っている）している。そしてそれはさまざまな配慮のうちの、何時も具体的なある配慮であるから、配慮のうちで散在しているはずで、それら個々の配慮を取りまとめて、術語的にこう言うのである。Heidegger自身も「存在の考究といつても、じつは、いつも既に現存在にそなわっていて、存在者とのいかなるやりとりのうちにも「生き生きと」はたらいっている存在了解を、とりたててあからさまに実行してみることに他ならない。」³⁶⁾と言っている。現存在は何かと＜やりとり＞しているに違いなく、＜やりとり＞も何かある気分でやっているに違いなく、そのことを、言葉を厳密にさだめて術語化したのである。

さて、配慮のもとで出会う存在者を、道具(das Zeug)と呼ぶ。さらに「厳密な意味では、一つだけの道具は決して存在しない。道具が存在するには、いつもすでに、ひとまとまりの道具立て全体がなければならない。この道具がまさにこの道具であるのは、このような道具立て全体においてなのである。」³⁷⁾とされる。この文章から、日常の世界では、事物は人間にとっての様々な道具として先ず存在しているのだと理解されそうだが、そうした理解は誤りであろう。むしろ彼は逆のことを言っている。事物は、現存在のその時の指示連関に服している配慮の眼差し(Umsicht)のもとで、道具として開示されるのである。外へ出るためにドアのノブにふれる。外へ出るという気分、そのための指示連関を配慮している眼差し、ノブはそうした連関のうちにある。このとき5階のベランダの床にある30cm四方の枠は外へ出るための道具ではなく、目にも留まらず、意識もされない。まして、シーツが4階への縄ばしごという道具になるという、その連関を目指す

配慮も全くない。シーツは配慮によって、寝具になったり、縄ばしごになったり、風呂敷になったりする。道具とはそのような意味合いである。

現存在は何時でも何かあることを主旨として、そういうところへ（べつに場所のことではない）、ある趣向のあるところへ自らを差し向けている。そして何時もある存在者を用具的なものとして自らに出会わせている。このようにそこへ自己を差し向けていることが了解されている場面が、そこで存在者と趣向性で出会うことが見越されている地平であり、そこに＜世界＞が現象している。こうして＜世界＞は＜世界＞を構成する諸々の連絡関係として了解され、こうした連絡関係の引昭を彼は指意（bedeuten）と呼び、その全体を有意義性（Bedeutsamkeit）となづけた。これらのことは次のようにまとめられる。

「現存在は、有意義性に親しんでいるその有様において、存在者が発見されうることの存在的な可能性の条件であり、その存在者は趣向性という存在様相において世界の内部で（現存在に）出会い、このような有様でそれのそれ自身のありよう（用具性）を打ち明けるのである。現存在は現存在たる限り、何時もこのような存在者である。即ち、それが存在するとともに、本質上すでに、一組の用具的なものの連関が発見されている。」³⁹⁾

下線部は筆者が引いたが、現存在はこの一組の用具的なもの連関のうちで、彼の日常世界・環境世界と不可分になっている。＜配慮＞のうちに、＜配慮＞という情状性に見合った連関が成立し、＜配慮＞は弱まったり強まったりしながら、次の状況へ流れ込んでいく。この一組の連関は、存在的には機能環と同型であると呼ぶものである。勿論、Uexküll が術語化した機能環のように、定義された内容を持つ必要はないし、多種多様の現れを示すであろうが、連関は＜配慮＞に見合うはずで、それが連関の機能であり、言葉の正しい意味でそう呼べる。またこの状況での現存在の在りようについて、＜配慮（Besorgen）＞という言葉が使われたのは、環境世界での他の存在者へと目が向いていることをとくに問題にしたからである。

第5章で内=存在そのものが問題になると、＜配慮＞は＜情状性 (Befindlichkeit)＞と読み替えられて、これが現の根底を規定している実存範疇であるとして再提示される。Heidegger 自身が、これは存在的には、日常の場面での気分 (Stimmung) と呼ばれることがらと違うわけではない、と言っている。そしてこの情状性をめぐる議論が、配慮という概念の中核にあるのが実は何であるのかを明らかにしてくれる。重要であると思うので長い引用する。

「日常的な配慮 (Besorgen) のなかで現れてくる坦々たる屈託のなさや抑えられた不機嫌さ、前者から後者へ、後者から前者への移り替わりや、それが何時か鬱ぎへ落ち込むこと—これらの現象は、現存在のなかで他愛のない仮初めのものと思われて、気にもとめられずにいるけれども、存在論的にみれば決して無ではない。

気分がこわされたり、急に気分が変わったりするのは、実は現存在にいつもすでに気分があるからである。しばしば長くうち続く単調に色あせた味気なさは、鬱ぎと混同されてはならないが、それは無であるどころか、むしろそのなかでこそ、現存在が自分自身に倦きあきしてくるのである。存在することが重荷としてあらわになったのである。何故かは判らない。現存在はそれを知ることができない。何故かというに、現存在がそこで現としてのおのれの存在に直面させられているこれら気分の根源的な開示力にくらべれば、認識にそなわる開示力の射程はこれに遠くおよばないからである」³⁹⁾

自分のある気分を、認識の力でどうかすることは出来ない。＜配慮＞は気分彩られている。気分を＜配慮＞から取り去ることはできない。そればかりか現存在そのものからそれを取り去ることができない。彼は気分を現存在の根本規定であるとして、それを存在論的には＜情状性 (Befindlichkeit)＞と呼んで実存範疇であるとした。環境世界における＜配慮＞は、内=存在という楽章で再び演奏され、その主たるテーマは気分であるとして取り出されたのである。また現存在はその気分であることを自由にはできないこと、現存在は、ある気分であることを自由

には選べないことを、被投性 (Geworfenheit) と呼んで、一般に現存在が自らの現を選べないことの謂いであるとした。またこの〈情状性〉と並んで〈了解 (Verstehen)〉が、等根源的に現の本質的契機であるとしてとりだされている。〈了解〉は、むしろ最初に取り出された「存在了解」を可能にしてその〈了解〉である。

さらにこの〈情状性〉と〈了解〉が次の第6章で再び変奏され、〈情状性〉は〈関心 (Sorge)〉として第2変奏される。変奏の内に我々の探しているフレーズが出てくる。長い文章を引用するが、主要なテーマを順番に抜き出し、途中は消してテーマのみを浮き立たせて焦点化し、それでも楽曲になるように構成してみよう。

「現存在の存在論的構成には、存在了解 (Seinsverständnis) がそなわっている。現存在は存在しながら、その存在においておのれ自身に開示 (erschlossen) されている。情状性 (Befindlichkeit) と了解 (Verstehen) が、この開示態 (Erschlossenheit) の存在様相をを構成する。現存在がそこで、際だつておのれ自身に開示されているような、そういう了解的な情状性 (verstehende Befindlichkeit) が現存在にあるであろうか。……この課題の達成のためには、現存在自身のうちに含まれているもつとも射程距離の長い、最も根源的な開示可能性を求めなければならない。……その開示態に、現存在は単純化されて到達しうるのでなければならない。……開示されることがらとともに、存在の構造全体性があかるみにできるようにしなければならない。こうした方法的要件をみたす情状性として、我々の分析は不安 (Angst) の現象を基礎におく。……不安は現存在の存在可能態として、そのうちで開示される現存在そのものを示すとともに、現存在の存在の全体性を明示的にとらえるための現象的基盤をも与える。かくして現存在の存在はおのれを関心 (Sorge) としてあらわにする。……関心と同一視されやすい諸現象に対照してみても、関心について (それらとの) 境界設定をする必要がある。このような現象は、意志、願望、傾情 (Hang)、衝迫 (Drang) である。関心 (Sorge) はこれらから導きだしえない、むしろこれらが関心 (Sorge) によって基礎づけられている。」⁴⁰⁾

この第6章は関心 (Sorge) についての分析に当てられ、これで現存在の準備的基礎分析が一応終わることになる。Heidegger によるこの作業は、隙間を作らず、オトギバナシを作らず、書くべきことは全て書き、かつ精緻を極めているから、それを要約することは無謀であるが (もつともやってきたことは彼の言葉で要約することであったが)、それを承知で私なりに以下のように纏めてみる。

世界=内=存在である現存在について、その世界性を調べる手始めとして現存在が日常的に馴染んでいる環境世界 (Umwelt) での現存在を見ると、そこでの現存在は、<開け (Erschliessen)>であり、自らの存在を存在了解 (Seinsverständnis) し、且つ<配慮 (Besorgen)>という様態にある。環境世界の事物のあるものは、この配慮のうちに用具性を示す道具として現れ、いつも一組の用具的なものの連関が発見されている。こうした現存在の指し向けの引昭の全体を有意義性と呼ぶ。

現存在が内=存在であることに焦点化して、再び存在了解と<配慮>を考察してみると、存在論的実存範疇として<了解 (Verstehen)>と<情状性 (Befindlichkeit)>を導出することができる。更に踏み込んでいうて、射程距離の長いつまりそこから様々な有用な概念を導き出せるような、それによって存在の全体を明るみに引き出してくることが出来るような、それによって現存在を見事に単純化できるような、そのような了解的情状性があるが、あるとすればどんなものかを問い且つ分析してみると、我々はそれを満たす<情状性>として、<不安>を導出することができる。この<不安>において開示されるものを存在論的に性格付けていくと、現存在の存在は、<関心 (Sorge)>として明らかになる。この<関心>という存在論的実存範疇に傾情 (Hang) や衝迫 (Drang) という存在的概念は基礎づけられている。

Heidegger は自分の<こころ>にキリを揉み込むようにして、現存在の実存論的起源を求めて遡行している。この航海で彼が行きついた不安という情状性を、存在論的に解釈する道筋のうちに、実存主義という、今世紀の人間精神を際だっ

て特徴付けている思潮の主要な諸概念、頽落、死、空談、世人などについての哲学的基礎を与えたとされている。ただし彼自身は実存主義者と呼ばれることを好まなかったと言われているし、我々の問題もそこにはないが、この不安が開示する〈関心〉という現存在の存在様相のうちに、傾情や衝迫のカテゴリーに所属する存在的な諸概念が基礎づけられているという彼の立言は、彼の存在論のうちに我々が探していたそのものであり、ここで我々は、Heidegger を Uexküll に結びつけ得るような言葉、たとえそれが何を指すにせよ、そのことが引き続き新しい問題になるにせよ、そうした言葉を見いだしたと思う。

竹田 青嗣氏は、この〈関心〉をさらに〈欲望〉へと読み替えてみたいと主張する。彼はその理由を四つあげているが、いずれの理由も、存在論的考察によって関心からさらに欲望が導きだされてきた理由とは考えにくい。彼があげているのは「……と考えた方がよい」という理由であって、「……と考えなくてもよい」という理由と同等であるように思う。例えば、Heidegger が遂に辿り着いた〈関心〉という現存在の存在論的なありようは、別の言い方、平らかにそれこそ〈関心〉を出来るだけ薄めて、対象化さえするような気分で言うと、Husserl, E が〈意識の志向性〉と言ったことと同等になるが、それを踏まえて、竹田氏は「まず現存在のありようは、必ず〈意識〉内部の構造としてのみ捉えられるが、その場合、「根本性格」としての「意識の志向性」という言い方は、コギト的な明晰判明な〈意識〉のみを意味しない。〈志向性〉は明晰な思考、判断、意志だけでなく、感情、情動といったノエシス作用をも蔽っている。〈欲望〉という言葉はそのニュアンスにかなうからである。」⁴¹⁾と述べる。

確かに〈配慮〉に基づく配視 (Umsichte) のうちに、いくつかの環境世界の事物が用具的連関のうちに開示されてくるときには、欲望の言葉が使いたくなるし、竹田氏のように「欲望相関性の観点で理解するのがいっそう適切だ」⁴²⁾と言いたくなるが、Heidegger が欲望の言葉を使用しなかったのは、この言葉は、すぐれて存在的な各種用語と置き換えられやすい言葉であり、そこから生ずる基本的な誤解、この議論が「欲望についての存在的な学」であるとして受け取られるの避け

たかったからだと思う。

＜関心＞が＜欲望＞へと読み替えられれば、＜欲望＞はもちろん存在論の言葉にならなければならない。竹田氏は「ここでの＜欲望＞は存在論的概念だが、この言葉は、わたしたちが現存在のありようを見ようとするとき、日常的に用いている＜欲望＞という概念を考えてゆくことがそのまま現存在の規定に繋がる、という特質をもっている。」⁴¹⁾と述べているが、このように単純に事が進むであろうか。

例えば＜食べたい＞という欲望を取り上げてみよう。＜食べたい＞という欲望のもとでの＜食べる＞という行為によって、人は何を実現しているのであろうか。

存在的には、そしてある時には存在論的にも生存のための栄養補給である。＜食べる＞という行為は、誕生からその死に至るまで、持続的に、周期的に、日常的に、休みなく実行されている。従って栄養補給とは全く無関係な多くの存在論的な行為が、この＜食べる＞という行為に覆い被さって自らを表現する。何かの欠乏の意識や無意識、何かへの渴仰の意識や無意識が、＜何かを食べたい＞という表現を獲得し、その方向への傾斜を生み、この傾斜とそれによる＜食べる＞という行為は、実に様々な存在論的様相を示すことになる。この存在論は栄養補給とは無関係である。しかし＜食べた＞からには生物学的効果もまた確実に、それこそ存在することになる。栄養補給という存在の領域が、存在論の領域に確実に影響する。この影響をしっかりと区分して、存在論を存在と切り分けつつ論じることが極めて困難になると思う。

我々は Heidegger を Uexküll へ結びつけて見るという試みを、差し当たりここでうち切ろう。＜関心＞が欲望へと読み替えられなくても、傾情や衝迫などのカテゴリーに属する各種の個別的、存在的な欲望は、＜関心＞という存在論における了解的な＜情状性＞、つまり実存に基礎づけられており、さらにこれは日常的环境世界においては、＜配慮＞と表現するのが適切であるようなありようを示しており、このもとで環境世界における事物のひとまとまりの用具的連関が開示されてくる。ここで竹田青嗣氏の用語を借用すれば、Heidegger は「環境世界は欲望相関的に構成されてくる」と考えていたのではないかということになる。そうであれば、これは環境世界論における Uexküll の生物の捉え方と同型である。

V—地球環境問題についての考え方

我々はここで Uexküll や Heidegger から学んできたことが、地球環境問題を捉える上でどう生かすかを考えてみよう。人間以外の生物からは、環境世界を超えた〈世界〉を見ることが出来ないのです、ここからは、我々は Heidegger の所説から問題を見ることになるが、Heidegger の所説は Uexküll のそれと同型であることは見てきたとおりである。両者はともに、人間を含めて〈生きもの〉はその身の回りの環境世界で生きている、そこでのやり取りで、生存に必要な物や事の出し入れをしている、〈生きもの〉とそれが生きている場面を一体化する機能的な連関があり、〈生きもの〉はこの連関の項として、それにしっかりと填り込んでいる。そしてこの連関は、〈生きもの〉の欲求や欲望と相関的であると主張している。

このことを人間について、装置や測定の手助けを借りずに、Heidegger に従って最後に意識に与えられる言葉で詰めて言い直すと、「人間は日常的な身の回りの環境世界においては、〈関心(Sorge)〉に基礎づけられている様々な傾情(Hang)や衝迫(Drang)を具体的に現実化している。彼は常に〈配慮(Besorgen)〉の、ある具体的な様式を示している筈である。彼は、「企て」たり、「探し」たり、「規定」したりしている。「止め」たり、「休んだり」もしている。彼は常に具体的になにかであって、〈情状性(Befindlichkeit)〉と呼べるようなある傾斜、ある特異点を示している。全ての色彩の混じった白色や白色雑音ではない。それらは現存在の傾斜としての〈配慮〉のうちに現れる一組の用具的な連関のうちに、現存在の行為の解発、その方向づけられた合目的性、持続性、周期性、などとして具体的に現れている。〈関心〉という現存在の基本構造は、日常の言葉で語られることのうちに滲出し、その有様を開示している。」と言い換えられる。これが我々の次の出発点になる。

章一 世界問題或いは普遍的環境問題として始まり、全ての地域の具体的な地域環境問題へと進む地球環境問題

これまでのところ、重大な環境問題というものは全て地域に於いて発生している。地域住民にとっては、環境問題とは、まさに身の回りの環境世界の問題であり、それは健康に直接関わる生存の問題であり、問題は太抵の場合は、地域に持ち込まれた効率優先の産業の論理によって引き起こされているものであるから、それに対処するための諸連関が「配慮(Besorgen)」のうちに配視され、様々な形式でのさし当たりの安定、或いは均衡が地域において達成されているものもある。

しかし、地球環境問題として認識されている諸現象は、いずれをとっても、人間を含めての生きものの生存条件を劣化させ、このまま放置すればその絶滅を含めてより深刻な影響をもたらすと考えられる方向へ現在も進行中であり、しかもリジョナル、或いはナショナルな水準で安定が計りうるとは考えられず、問題は簡単に地域と国境を越えてグローバルになり、さらに世代間での公平も問題になるような事ばかりである。問題のこうした特質が、最も先鋭化して現れている「温室効果ガス」の増大による「地球温暖化」の現象を念頭に置いて次に進もう。

V-2 世界問題として始まった「地球温暖化」

IPCC（気候変動にかんする政府間パネル）が、化石燃料の消費、熱帯雨林の伐採が当時進行中のペースで行われれば、平均地表気温は、2020年には産業革命以前の水準に比して約1.8度上昇し、21世紀の終わりに約4度上昇するとの予測を報告したのは、1991年である。1997年12月には、この地表気温上昇の最大の要因と考えられている「温室効果ガス」の排出削減をめぐる、国際会議が京都で開かれる。気象が激しくなっているような印象もあるが、今のところ「地球温暖化」によって、何かが具体的に環境世界に起きたと言っている状況ではない。海面の上昇も危惧されているが、いまのところ水没した都市や海岸があるわけではない。にもかかわらずこの予測された環境問題は、その予測の重大さ故に重要な政治問題になっている。そしてこの問題には、もう一つの重大さが付いている。

そのもう一つの重大さとは、現在のところ温暖化が急激な気候変動として具体的に現れて環境世界に生きている人間に直接働きかける段階にはまだ達していないこと、これが更に進んで、具体的に環境世界に生きている人間に直接働きかけ

る段階に到達すれば、人間に働きかけてくる（人間が生み出した）力を、人間の力で左右することは不可能になっているであろうこと、これである。

問題が気候変動として具体的に個人に直接働きかける段階に至れば、個人がそれぞれ解決へ向けての行動を起こすことは十分に期待できる。問題の出所が身近な環境世界にあることが明確に認識できる場合には、個人はかなり強い動機のもとにその解決に向けての行動に出ることが、例示を出すまでもなく、数多くの場合で立証されている。かつて槌田・敦氏は「ゴミ問題について当面しなければならないことは、とことん困り果てることだ」⁴³⁾と喝破したが、問題が＜環境世界＞の問題になることで、始めて基本的な解決へ向かいうることを指摘したのだと思う。問題が環境世界での個人の生存に関わる場合、その解決へ向けての様々な用具的な連関の組は、その環境世界に生きている人々によって様々な把握され、従って様々な取り組みがなされ、その環境世界の政治経済的、或いは民俗文化的、或いは科学技術的、その他諸々の条件を加味しながら、ある連関が選ばれていくだろう。勿論その過程では、激しい闘争がある場合もあるだろう。地域での環境問題の解決、あるいはさし当たりの安定の多くはそうしてなされてきている。

しかし地球環境問題、とりわけ「温室効果ガス」の増大に由来する「地球温暖化」の問題は、各地域で問題が「問題による影響」として顕在化したときには、どこの地域でも問題が顕在化し、問題の現実化とその影響は、始めから地球規模になっていて、人類を圧倒するだろう。したがって問題形成が進行しつつある途中の現段階で、「温室効果ガス」の増大が分明的な気候変動として顕在化する前に、この問題に対する人間の、それも全人類的な何らかの働きかけを考えるのは理にかなっているし、先にふれたようにそれを実行するためのプラン作りが実行されている。しかしここにもまた難題がある。＜世界＞における問題に対処するための連関にたいして、環境世界に生きる人間の＜関心＞を対応させることが出来るか、＜関心＞に基礎づけられているような動機を、重要な項として連関に組み入れることが出来るか、そもそも＜世界＞での問題に、＜環境世界＞で生きている人間の動機を、適切な無理のない形で移し入れることが出来るのか、という問題である。

平成9年11月12日の朝日新聞によると、「温室効果ガス削減の国内対策を検討す

る地球温暖化問題関係審議会合同会議」が首相に提出する報告書の最終案が明らかとなり、その対策の一つに国民の自主努力を求める項があがっているという。もとより、全ての対策の基底にこのことがなければ、対策は実効性をもたないだろうし、個人が意識的、自主的にこの問題に関わることなしに、事態が良好な方向へ向かって進行して行くということはもうありそうもない。全ての個人が意識的に環境問題に関わり、地球環境を安定的に保持することについて、具体的に日常の環境世界での行為においてそれを実行できなければならない。しかし問題は今のところ＜世界＞で起きて進行している。

身近な身の回りの環境世界においては、人間も生物も生存に直接関わるような連関のうちに生きている。飲んだり食ったり、外敵や細菌を遠ざけたり殺したり、性のパートナーと棲んだり住んだりしている。人間以外の生物は、この連関のうちに閉じこめられている。「温室効果ガス」の濃度の増大で、環境世界での人間を含めての生きもの全体の生存が脅かされることになっているが、これはいまのところ人間の知識であって、大部分の人間にはこれが肌身に直接感ずる形での脅威にはなっていない。従って日常生活において、「温室効果ガス」の増大にブレーキをかけるような項を含んでいる用具的連関（技術的にはそのような機能的な用具連関は多数作ることが出来るだろう。）に、＜配慮＞のうちにしっくりと填っている自分を見いだすことはないだろう。彼は＜無理＞をしなければならない。「冷暖房の温度設定をそれぞれ28、20度にとどめる」や「車のアイドリングを」しない」などの自主努力をすることが求められているが、これで実効があがらない場合には「新たな措置を講ずることも検討する」ことになっている。求められていることが、用具的な連関のうちに既に発見されていて、誰によっても＜無理なく＞実行されるとは考えられていない。求められているものは、環境世界で＜配視＞によって普通に＜開示＞されてくるものではなく、無理に注目しなければ見えてこない。それは今のところある無理なく＜世界＞に属している。

＜開示態＞である人間は、人々が共になって様々な形態で＜世界＞を開く。科学世界、技術世界、経済世界、それらから複雑に構成されている産業世界、そうした＜世界＞は理論的、地理的、行動的、その他様々な様相で次第に拡大してい

き、地球規模になり、＜環境世界＞をも激しく侵略している。しかしこうした様々なく世界＞を創るとき、或いは＜世界＞に込められていく理念が、全人類の＜環境世界＞における＜関心＞や＜配慮＞の様式と、手ひどく対立したり、大きく矛盾したり、全く関係なかったりすることはないだろう。＜世界＞とは、＜環境世界＞のある人々の＜関心＞や＜配慮＞に基づく用具連関の展開・充実として開かれていき、様々なく世界＞の理念もこの拡大された用具連関の理念であって、(用具とはむしろ物體的な道具のみを指しているわけではなく、様々な理論的・概念的な装置を含み、むしろそれが本流である) それは本もとの＜関心＞や＜配慮＞とは異なったものになることもあるであろう。＜世界＞の間での対立とは、この用具連関の間の矛盾や対立として理解できる。

3 km離れたところに住んでいる人に会いたいという現代の恋人たちの＜配慮＞(＜配慮＞そのものは2千年の昔とそんなに変わってはいないだろう、万葉の人々の歌は、いまでも変わらず我々の心を打つ)、この＜配慮＞が見いだす連関のうちには、現代の＜産業世界＞が様々な項として出現している。電話、自動車、自動車を走らせる道路、夜の道を照らす街路灯等々である。また同時に同じ＜配慮＞のもとで、手紙を書き、舗装されていない道を選び、自転車走らせる若者もいる。この二つの用具連関を創りだしている理念は大きく違い、連関をなす項も異なっている。このように＜産業世界＞からの項が示しているものは我々のある部分であるが、しかし、＜配慮＞が示している＜関心＞とは無関であり、それと抵触したり矛盾したりするものではない。

しかし地球環境問題、とりわけ「温室効果ガス」の増加に由来する地球温暖化の現象は、この＜産業世界＞の理念である「資本の論理」や「効率の論理」が生みだした問題であるから、「温室効果ガス」削減に資するようにしようとする項は、これらの論理に矛盾し、極端な場合には、＜産業世界＞の自己否定を目指すようなもともとの理念を解体する意味を持っており、こうした項を、＜産業世界＞が深く入り込んでいる、現代の＜環境世界＞の用具連関の項とすることには困難さがある。更にこれには「欲望」の自己規制という側面があり、＜関心＞という現存在の傾斜とも矛盾し、社会に新たなジレンマ構造を生み出す恐れもある。

地球温暖化防止のための国内対策の一つとして求められている冷暖房の温度設定の限定や車のアイドリングをしないなどの「自主努力」は、用具連関に、素直に自然に組み込まれているものではなく、「自主努力をしない」、「その時の欲望のままに温度設定やアイドリングをする」という選択肢との間での、選択の問題になっていて、これは個人どうしの間、或いは個人と社会の間での、いわゆる「囚人のジレンマ」⁴⁴⁾の構造をしめしていると考えられる。「自主努力をしない」という選択が、「自主努力をする」という選択に出会えば、「……しない」選択の行為者は、「……する」選択の行為者よりも、当面は高い利得が得られると考えられ、しばらくはこの条件が満たされているとすると、個人をP(Person)、社会をG(Gesellschaft)で表して、両者の利得構造を2×2の支払い行列(Auszahlungsmatrix)で表してみると第1表のようになる。

第1表 個人(P)と社会(G)の間の「自主努力」をめぐる【囚人のジレンマ・ゲーム】の利得行列表

		G (Gesellschaft)	
		「自主努力する」	「自主努力しない」
P (Person)	「自主努力する」	+for P ; +for G	--for P ; ++for G
	「自主努力しない」	++for P ; --for G	-for P ; -for G

社会全体が「自主努力」を続ければ、「温室効果ガス」の排出をある段階で安定させることが出来るかも知れないし、その事で気候変動を許容できる範囲にとどめる可能性が高くなるかも知れないし、その事で持続的発展が可能になるかも知れない。しかし構造はジレンマを示しており、「自主努力をしない」戦略は、「自主努力する」戦略に当面は優越し、より高いペイを約束する。これは<産業世界>の理念に合致し、現存在の傾斜にも合致している。人々は全体として「自主努力」をしないであろう。従って、「温室効果ガス」の排出にブレーキはかからず、次の段階では、行動主体に対する法による強制が考えられるであろうが、整合性のあ

る国際的な取り決めを、全ての国家を含めて作ることは容易ではないであろう。また法による強制は、いずれそれに見合う物理的強制力の問題が浮上し、未来図は暗澹としてくる。「自主努力」というような、それに対抗するより有利なオプションを合法的に作り得るような項でないもの、「強制」というような人格の自由を尊重する〈自由な世界〉を脅かすような項でないもの、現代の〈環境世界〉で日常的な項、こうした項として我々は料金や税金に思い至る。排出する主体は支払うのである。これに様々な条件を付けることは可能であろうが、原則は支払いである。さて、本稿はここでうち切る。当初に述べたように、論述の目的は二つあった。ひとつは、Uexküll と Heidegger の思索の類似性を調べることで、ふたつめは、地球環境問題について、両者の思索から何か示唆を得たいということであった。最初の課題については、両者の同型性をある程度言うことが出来たと思っている。ふたつめの課題については、簡単なスケッチ程度の論述しかできなかった。稿を改めて再度考究するつもりである。平成9年12月京都で「温室効果ガス」排出の削減へ向けて国際会議が開かれる。前途に希望の見えるような話し合いや取り決めがなされるよう心から願う。

本稿を準備するに当たって、本学共通講座教官田代真氏との対話が極めて有益でありました。その事をここに記して、深甚なる謝意を表明する次第です。

注

- 1) 大庭 健：環境と人間—ホモ・ロクウエンスの〈文化の暴力〉への一試論—、新岩波講座哲学 第6巻 1986、272—302。
- 2) Umwelt の訳語として「環境世界」としたが、それはこの言葉を Uexküll の用語、あるいは Heidegger の用語として意識しているからである。通常 Umwelt は、大庭氏もそうであるように、先ず「環境」と訳される。大方の独和辞典はそうになっている。Umweltschutz は「環境保護」であり Umweltverschmutzung は「環境汚染」である。「環境——」は独語圏では「Umwelt——」として流通している。しかし独語の「Umwelt」と日本語の「環境」をほぼ同等と

考えてしまうことにはおおいに疑問がある。日本語の環境と言う言葉には「対象化された人や物たち」というニュアンスが強く、私自身とは違うもののこと、私が飲むおいしい水ではなくて実験に使う純水に似たような響きがあるが、独語で Umwelt というその環境には(私の)世間、(私の)境遇というニュアンスもあって、それは自分自身に関係があるという感じがずっと強い。ナチズムの時代には「血と大地」にさえなった。日本でいつ頃から「環境」という言葉がおおよそ現在のような使われ方で使われるようになったかについては、残念ながら調べがついていないが、漢語としての「環境」という言葉は諸橋大漢和によれば元史に見えるという。一方、Umwelt はずっと新しい言葉である。グリム兄弟のドイツ語辞典(ライプツヒ、1936年)によると、この言葉は仏語の milieu (mi-中央, lieu-場所) に対する訳語としてデンマーク語 omverden (om-まわりの, verden-世界) に倣って創られ、1800年頃から使われたのだという。幾つかの文例が紹介されているが、なかに Hitler, A の「我が闘争」からのものもある。体制であるナチに対する当時の編集者のおもねりも感じられるが、引用してみる。“ich hatte mit meinem schicksal noch so viel zu tun, dasz ich mich um meine umwelt nur wenig zu kummern vermochte.” ここでの Umwelt を環境と訳したら軽すぎるだろう。古今東西を問わず、専制的人物はずいぶんと背負ってるようだが、そんなに背負っても本人は潰れないのだから、其処の人々はきっと物凄く軽いのだろう。人間は空腹でも軽くなる。

- 3) Uexküll, Jacob von: Theoretische Biologie, 2. Aufl., Springer Berlin 1928. Uexküll の著作は多いし邦訳されているものもある。本稿でも必要に応じて他の著作にある彼の立言にも言及するが、それらにも注をつけて出典を記述する煩は避ける。つまりこの論文では、引用はこの著作からのを主とし、以下では TheoreBiol '28 と略記する。
- 4) Heidegger, Martin: Sein und Zeit, Gesamtausgabe Band2, Klostermann Frankfurt am Main 1977. この著作は最初は1927年に Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung に現れたのであるが、同時に単行本も出版されて、現在も版を重ねている。本稿では、Klostermann 社から出版されている全集の第2巻がそれに当たるので、それを参照した。Heidegger の著作も多岐に渡るが、本稿では主にこの著作 (Sein und Zeit) に展開されている、それも前半の思索に注目する。これからの引用は、以下では (SuZ S. X) のように略記する。X のところには数字が入るが、これは Klostermann

- 版での頁の欄外に付されている数字に対応し、数字によって、引用したその SuZ の言説が Klostermann 版の何処にあるかのおおよその箇所を示している。数字は本書が当初に刊行された Tübingen の Niemeyer 版の頁に対応し、数字の欄外での位置は、Niemeyer 版での各頁の頭の文章の位置に対応している。
- 5) 小沢徳太郎：持続不可能な社会から持続可能な社会へ，科学，67巻，2号70-73，1997，岩波書店。自然科学についての記事を中心にする一般読者向けの科学雑誌であるが，人間とその社会を問うことなしには，それと深く関連している産業経済システムやそのシステムに関わっている領域の自然科学も健全に発展し得ないとの認識が示されている。
 - 6) 関 礼子：自然保護運動における「自然」—織田が浜埋め立て反対運動を通して—，社会学評論 47巻，4号，35-49，有斐閣 1997。
 - 7) TheoreBiol '28, S. 228
 - 8) Koffka, K: Principles of Gestalt Psychology, 40, Kegan Paul London 1935.
 - 9) TheoreBiol'28, S. 228
 - 10) ibd., S. 100 下線部は筆者が引いた。生物が環境世界に閉じこめられていること，人間以外の生物には<世界>の概念が必要でないことの2点は，後の思索家たちに大きな影響を与えた。Dasein は現存と訳出しておいたが，この言葉は生きてその辺をウロウロしている生き物（人間も含む）を指す言葉で，特別に人間だけを示している訳ではないから，この使い方に問題はないのだが，我が国では，Heidegger が「存在を問う唯一の存在者としての人間」にのみ Dasein を当てて術語化し，それを現存在と訳すのが人口に膾炙しているから，特にそれとは違えておいた。
 - 11) ibd., S. 100
 - 12) ヤーコブ・フォン・ユクスキュル：生命の劇場，入江・寺井訳，31頁，博品社 1995。
 - 13) TheoreBiol '28, S. 100. 101
 - 14) Lorenz, Konrad: The Foundation of Ethology, 108, Springer New York 1981.
 - 15) J.-P. エヴァート：神経行動学—neuroethology—，小原・山元訳，1頁，培風館 1982. 本文中の下線は筆者による。
 - 16) Lorenz, Konrad: Die Rückseite des Spiegels, -Versuch einer Naturgeschichte menschlichen Erkennens-, 15-23, R. Piper & Co. Verlag

München 1973, 本文中にある引用文は、認識論的プロレゴメーナと題される序章第2節及び3節にある文章(15頁から23頁)を、飛び飛びに拾い出して筆者が纏めたものである。

- 17) ibd., S. 285
- 18) Gehlen, Arnold: Zur Systematik der Anthropologie, in: Studien zur Anthropologie und Soziologie, Soziologische Texte Bd. 17, Seite 31, hrg. von H. Maus und F. Fürstenberg, Luchterhand Neuwied am Rhein 1963.
- 19) ibd., S. 32
- 20) Scheler, Max: Die Stellung des Menschen im Kosmos, Bouvier Bonn 1928. この書物は以後にも版を重ねており、本稿では1995年の第13版を参考にした。
- 21) ibd., S. 37 英訳版では<auserhalb>は<transcends>と訳されている。誤訳ではないが意訳に過ぎるのではないか; Scheler, M.の意を汲み過ぎているのではないかという印象がある。<auserhalb>は中心の外へ出る、郊外に住むぐらいのことで、天上へ上るような意味はなく水平移動である。<transcends>は超越するであり、超然として無関心、関係ないという意味と共に、天に昇って何かに、何か優れたものになるという上行するニュアンスもある。Schelerは人間と他の生物との比較で人間の優位性を明らかにしようとしており、ハナから神懸かりになっていた訳ではない。またこの英訳をもとにして再び独語へ移す事を試みた場合に、<transcends>は<transzendenz>と訳されて、本来の言葉であった<auserhalb>に戻される可能性は極めて低いだろう。
- 22) Gehlen, Arnold: Zur Systematik der Anthropologie, S. 28; Luchterhand 1963.
- 23) ibd., S. 31
- 24) Daseinの訳語である。ただしここでのDaseinはHeideggerによって「問を問うということがこの存在者の様態なのだから、……この存在者は問が向けられている等のもの—存在—から規定を受けている。……われわれ各自がそれであり、問うということを自己の存在可能性の一つとしてそなえているこの存在者を、術語的に(Dasein)と表す。」と規定され、問を問うということに焦点化することで、彼はこの言葉を、人間だけを(問わない人間もいると思うが)表現する術語にしてしまった。普通には、生きて此処や其処をうろうろしている生き物がDaseinである。
- 25) SuZ S. 6

- 26) SuZ S. 13
- 27) 木田 元：ハイデガー，20世紀思想家文庫4，岩波書店 1983, 61-67.
- 28) ハイデッガー：論理学－真性への問い－，佐々木 他訳，ハイデッガー全集(辻村 茅野他編) 21巻，創文社 1989 230頁。
- 29) Heidegger, Martin: Die Grundbegriffe der Metaphysik, Gesamtausgabe Band 29/30, S. 379, Klostermann Frankfurt am Main 1992.
- 30) SuZ S. 75
- 31) SuZ S. 54
- 32) SuZ S. 53
- 33) SuZ S. 64 本文では原典の記述を簡略化して，要約してある。
- 34) SuZ S. 66 本文中の訳文は，理想社から出版された細谷貞雄訳を参考にしたが，筆者の解釈で訳語を変えたり訳文を変更したりしたので，特に訳書を注としては掲げない。ねじ曲がっていけば，むしろ筆者の責任である。SuZ から引用した他の箇所についても同様である。
- 35) SuZ S. 67
- 36) SuZ S. 67
- 37) SuZ S. 68
- 38) SuZ S. 87 この部分は我々の議論にとって重要だと思われるので，原文を記述しておく。(Dasein ist als solches je dieses, mit seinem sein ist wesentlich schon ein Zusammenhang von Zuhandenem entdeckt－)
- 39) SuZ S. 134
- 40) SuZ S. 182
- 41) 竹田 青嗣：意味とエロス－欲望論の現象学－，ちくま学芸文庫，筑摩書房 1993.
- 42) 竹田 青嗣：ハイデガー入門，講談社選書メチエ，講談社1996.
- 43) 槌田 敦：環境保護運動はどこが間違っているのか？，宝島社 1992.
- 44) Krivohlavy, Jaro: Zwischenmenschliche Konflikte und experimentelle Spiele, Hans Huber Bern 1974.